

不登校生徒が安心して登校できるための別室の活用

不登校児童・生徒の状況

本校の不登校生徒は令和4年度では30名程度であった。その他、登校はできるが教室に入ることが困難な生徒も在籍している。友人関係、学業の不安、家庭環境によるものなどが主な原因となっており、登校できる生徒に対しては、別室の登校を促すなどの支援を行っている。

具体的な取組

○受け入れ体制の整備

校内別室指導支援員を配置し、別室の開室時間を学校の時程とほぼ同じにした。また、教員にも別室担当の時間を設定し、別室で過ごす生徒に対応できるよう整備した。その他、各クラスの授業をオンライン配信し、授業の進捗状況が分かるようにした。

○不登校生徒への対応

不登校担当教員やSSWを中心に不登校生徒への家庭訪問や面談を実施した。その際に、別室登校を勧めたり、別室の様子を見てみたりすることや、登校時間や下校時間を個に応じて設定することで登校への不安の低減に努めるようにした。

○校内別室指導支援員による指導

今までは別室に登校してくる生徒に対応するため、教員が交代で別室を担当していたが、校内別室指導支援員が主として対応するようにした。



○校内教育支援センターとしての役割

別室での様子を校内別室指導支援員、担任、SSW、生活指導主任等で構成される校内教育支援センターを設置した。別室登校する生徒一人一人に対して、情報共有や保護者連絡、面談、外部機関との調整など、チームでの取組とし、担任の負担軽減を目指した。

成果

別室対応の充実により、不登校生徒だけでなく、教室での生活に不安をもっている生徒や緊急避難的に別室を利用する生徒もあり、不登校の解消だけでなく、未然防止として別室を利用する生徒が増加した。

課題

別室を利用する生徒が増加したことにより、教室が過密になってきている。さらなる環境の整備が課題である。

校内教育支援センター（COCORO）について

不登校児童・生徒の状況

校内教育支援センターの対象生徒は、不登校生徒または教室に入る意思はあるが入りづらい生徒のために開設した。現在、学校全体での不登校生徒数（10 月末時点 30 日以上欠席）は 3 学年合わせて 53 名。そのうち、COCORO の利用登録は、16 名おり、実際に利用している生徒は、合計 10 名いる。

具体的な取組

学習サポート

- ・各自学習道具を持参しているが、各々に合わせたプリントも用意し、取り組み、難解な箇所の指導を行っている。
- ・担任と連携し、授業で使用しているプリントや教材、テスト等を COCORO 内で取り組んでいる。

居場所作り（リラックスタイム）

- ・学習の合間や最後に数名でオセロやマンカラ、トランプ、UNO で生徒同士でのコミュニケーションを図っている。
- ・各々が興味のあることをして過ごす。（絵を描く、読書、折り紙 etc）
- ・生徒同士や指導員・SSW との会話。

掲示物を利用したの情報提供

- ・カレンダーや予定表を掲示し、テストや行事など、学年の動きに沿った一体感を感じられる工夫を行っている。
- ・季節の移ろいを感じられる掲示。
- ・講演会や連絡機関の掲示。



SC との連携

- ・それぞれの面談内容や利用状況の共有を図っている。
- ・SC の訪問で、生徒の課題提案や課題の対処法のアドバイスをもらう。
- ・保護者の面談内容から意向や不登校の背景、親子関係を知る機会にしている。

成果

昨年度まで、1 日も登校できず家に引きこもりがちであった生徒が市の SSW と連携し、週 1 日登校できるようになった。また、いじめにあった生徒の緊急避難場所としての活用もあった。自分のペースで学習を進められるなど、落ち着ける環境を用意できた。

課題

ニーズの高まりとともに、生徒数の増加が見られ、支援員の人手や学習場所の確保が難しい。Wi-Fi などの設備面にも課題が残る。

校内教育支援センター（室名：こもれび）について

不登校児童・生徒の状況

不登校生徒は、令和5年10月末時点で15名おり、内6名が校内教育支援センターの利用を申請している。生徒は学習指導員と共に学習に取り組み、自分がどういう進路に進みたいかを考え、将来的に社会的自立に向けた活動を行っている。数名の生徒に関しては、「こもれびがあるから登校できている」という状況がある。

具体的な取組

個別の学習

入室時に生徒一人一人がその日に何を学習するか自ら決定し、学びを進めることを基本としている。また、必要に応じて学習指導員による教科指導を受けることができ、一人一人の生徒に個別最適な学びを提供することができる環境づくりを目指している。

少人数での学習・交流のための環境づくり

校内教育支援センターの利用申請時に、利用者の了解があれば、少人数で学習をしたり、交流活動したりすることができる。共に学習することができる環境を作るため、ホワイトボードや広い学習スペース（複数の学習機を利用）を完備している。

学習指導員とSSW

経験豊富な学習指導員が週4日、SSWが週1日待機しており、生徒は気軽に話をしたり、一緒に勉強をしたりすることができる。リラックスしたり雰囲気の中で、学習をしたり将来の進路を考えながら、有意義な時間を過ごすことができる。

プライベートが守られた空間

教室の入り口にはカーテンが引いてあり、中の様子が見えないよう配慮してある。また、室内においても利用者同士が気になるようであれば、パーテーションで区切りを設けたり、机や椅子の位置を調節したりと、互いが過ごしやすい空間を作ることができる。

成果

校内教育支援センターの開室時に15名の不登校生徒に本事業についてお知らせをして、内6名が利用申請、5名が通室している。生徒によっては、継続的に（週3日程度）登校できるようになり、同センター利用後に一部の通常授業に参加する生徒も見られた。

課題

学習教材やホワイトボード、パーテーション等の設備が不足しているため、どのようにしていくか次年度への課題としたい。

校内教育支援センター「スタディルーム」について

不登校児童・生徒の状況

不登校生徒（30日以上欠席者）は1年9人、2年25人、3年25人、合計59人である。その内スタディルームに通っている生徒は26人。スタディルームに通っている生徒でも、毎日参加している生徒や週に1～2回程度で参加する生徒、不定期に月1～2回しか参加できていない生徒もいる。

具体的な取組

《不登校生徒への学習支援》

- ・教室に入れず別室登校を希望している生徒へ学習支援。
- ・開設時には学習支援員とボランティアが常に複数で対応している。
- ・生徒によっては個別指導、集団指導を行っている。

《教育相談》

- ・スタディルームに通う生徒の相談を実施。
- ・生徒によってはS S Wにもつなぎ、家庭訪問を実施。
- ・これからスタディルームを希望している生徒へも事前見学や相談を実施。

《不登校委員会での情報共有》

- ・隔週ごとに木・金に開催し、学習支援員が参加。
- ・各学年の不登校生徒の情報を共有。
- ・スタディルームでの出席状況や指導内容を報告。



成果

- ・学習支援員が配置されたことによって、開催日数を週3回から4回に1日増やすことができた。
- ・学習支援員と担任とでその日の内に情報交換ができるようになり、生徒への対応がより充実した。

課題

- ・S S Wの配置が週1回と決まっているため、スタディルームに通う全生徒との相談が難しい。